論　　文

孟浩然「過故人荘」詩の「郭」の解釈について

川口　喜治

孟浩然の「過故人荘」(261頁、217)[1]は『唐詩三百首』にもとられ、孟浩然の田園自然詩の代表作のひとつに数えられる。まずその本文を掲げる。

故人具雞黍　　故人　鶏黍を具え
邀我至田家　　我を邀えて田家に至らしむ
綠樹村邊合　　緑樹　村辺に合し
青山郭外斜　　青山　郭外に斜めなり
開筵面場圃　　筵を開きて　場圃に面し
把酒話桑麻　　酒を把りて　桑麻を話る
待到重陽日　　重陽の日に到るを待ちて
還來就菊花　　還た来たりて　菊花に就かん

孟浩然が友人の荘園に招かれ歓待を受け農事を語り合うという交遊を描いた作品で、全編に脱俗的な雰囲気がただよう。また日常的なできごとを平易な言葉で表現するという点で、「春暁」などにも通ずる孟詩の特徴を見いだすことができよう。

さて本稿は、頷聯の下句「青山郭外斜」の「郭」の解釈について、先行研究を踏まえて再検討するものであるが、まず本稿執筆の動機を述べたい。論者はかつて孟浩然詩における都市の描写を考察し、孟浩然がその郷里における自身の生活を描くとき、襄陽県城という都市から隔った荘園に位置し、都市の喧噪を避けるという描写を意識的にしている、いわば都市忌避の態度を指摘した（「孟浩然詩に描かれた都市について」[2]。以下、前稿と称する）。前稿発表時には明示しなかったものの、以来、論者は、この態度の文脈上に「過故人荘」詩を位置づけ、荘園の遠景を描く「青山郭外斜」を「青い山が町（＝城郭都市）[3]の向こう側に斜めに連なっている」あるいは「青い山が町の外（のこの地）において斜めに連なっている」と解釈してきた。つまりこの句には、友人の荘園が都市を離れた場所に位置することが含意されていると考えてきた。

ところが最近、ひとえに論者の迂闊によるが、この句の「郭」を友人の荘園がある村の防壁とする説が、日中において多く存在することに気づいた。例えば、小川環樹氏は「郭」について「村のまわりの防壁であろう。町の城壁ではあるまい。」とされ、この句を「防壁のむこうには青い山がななめに見える。」と訳される[4]。またのちに整理するように本邦の多くの解釈が小川氏の説を襲っている。しかし一方で、町、町の城壁とする説も同程度に存在し、この「郭」の解釈については定論を見ていないようである。例えば、羅旭光氏がこの詩を論じた論文で、「“郭”有説是城郭的，有説是村郭即村外短牆的。在這裏説是村郭与題意更切合些。（「郭」について、城郭と解するもの、村郭すなわち村の周囲の低い牆壁と解するものがある。ここでは村郭と解するのが題意にいっそう適合する。）」[5]と述べるのも、この「郭」解釈に二説あることを示している。またさらには、小川氏の「郭」字の解説も断定的ではなく、「郭」を村の防壁とすることにいささかの躊躇があったのではないかとも思われる。

そこで本稿では、「過故人荘」詩の先行注釈・先行論文の整理、孟浩然詩に見られる「郭」の用例の検討、唐前詩・唐代詩に見られる「郭」についての検討等を通じて、この詩の「郭」が「村の防壁」、「町、町の城壁」、あるいはそれ以外の意味であるのかを明らかにしたい。また適宜歴史研究の成果を参照したい。なお本稿で引用する文献・資料に見えるものを除いて、本稿で「城郭」という場合は、

特に記さない限り「町」「町の城壁」の双方を含意していると考えられたい。

一

まず論者が前稿において指摘した孟浩然詩に見られる都市からの隔絶の態度について、簡単に紹介しておく。繰り返すが、それが、論者が「過故人莊」詩の「郭」を「町、町の城壁」と考える契機となったからである。

孟浩然の郷里・襄陽における作品を示す。襄陽は、孟浩然がその生涯の多くの時間を過ごし、彼の詩風の形成の場となったことは言うまでもない。「澗南園即事貽皎上人」（79頁、59）を示す。

弊廬在郭外　　弊廬　郭外に在り
素業唯田園　　素業　唯だ田園あり
左右林野曠　　左右　林野曠（ひろ）く
不聞城市喧　　城市の喧しきを聞かず
釣竿垂北澗　　釣竿　北澗に垂れ
樵唱入南軒　　樵唱　南軒に入る
書取幽棲事　　幽棲の事を書取して
還尋靜者言　　還（ま）た静者の言を尋ねん

詩題に見える「澗南園」は、孟浩然の郷里襄陽における住まいである。陳貽焮氏によれば、それは襄州襄陽県の県城の南方、峴山附近の江村にあった[(6)]。また襄陽県は「漢代以後、南北（華北と華中）の勢力が激突する地点として、あるいはまた、南北を結ぶ交通の要衝として重視された。さらにはまた、漢江の水運を利用した物資の集散地たる商港として、南朝以来繁栄し、遊楽の都市」[(7)]であった。

さてこの孟浩然詩において注目したいのは、この襄陽県城という大きく繁華な都市の描かれ方である。すなわち、「郭」「城市喧」として描写された県城が、それぞれ「外」「不聞」という字句が示すように、詩人が距離を置いた存在として描かれている。さらに見方を変えれば、「澗南園即事」という詩題の下では、襄陽県城に言及する必要は必ずしもないとも思われるが、にもかかわらず、自分の住まいが「郭」の内ではなく「外」に位置し、「喧」から隔絶したことを強調するのは、その位置づけに孟浩然が意味を見出していたからだと考えられる。この作品からは、詩人が、近辺のまち襄陽の都市的喧噪から身を隔て、家産として受け継いだ土地経営（「素業」）をまもりながら、「田園」「林野」といういわば脱都市的な時空の自由を満喫する者として自己を位置づけていることが読み取れよう。

また、開元六年（718）[(8)]、三十歳の時の襄陽における作品「田園作」（73頁、54）には、

弊廬隔塵喧　　弊廬の塵喧を隔つるは
惟先尚恬素　　惟れ先の恬素を尚べばなり
卜鄰近三逕　　鄰を卜して三逕に近く
植果盈千樹　　果を植えて千樹に盈つ
粤余任推遷、三十猶未遇。書劍時將晚、丘園日空暮。晨興自多懷、晝坐常寡悟。沖天羨鴻鵠、爭食羞雞鶩。望斷金馬門、勞歌採樵路。鄉曲無知己、朝端乏親故。誰能爲揚雄、一薦甘泉賦。

とある。冒頭四句について、「弊廬」は、やはり前掲の澗南園を指していると考えられる。ここでは、襄陽県城から距離を置いたところに田園を営み、都市の俗塵・喧噪から隔絶して生活しているのは、先祖が静かで質素な生活を尊んだことを継承するものだと述べている。作品では以下よわい三十にして、有力なつてもなく、いまだ仕官の途が見いだせない焦燥が歌われる。してみるとこの冒頭四句は、かくなる状況に至ったのは、先祖の処世を継承し、都市という世俗、換言すれば利益重視の人間関係の世界に関わってこなかったからであるという言い訳のようにも読み取れる。しかしそのような処世態度自体を否定しているわけではなく、むしろそのような先祖からの処世の継承を自覚していること

に注意を払うべきであろう。ひいてはこの自覚が、孟浩然が山水田園の世界に独自の美を発見してゆく精神的由来のひとつであったとも思われる。

次に、前稿では触れなかった「南山下與老圃期種瓜」（270頁、226）を掲げる。

　　樵牧南山近　　樵牧　南山に近く
　　林閭北郭賒　　林閭　北郭に賒（とお）し
　　先人留素業　　先人　素業を留め
　　老圃作鄰家　　老圃　鄰家と作（な）る
　　不種千株橘　　千株の橘を種えず
　　唯資五色瓜　　唯だ　五色の瓜を資（と）る
　　邵平能就我　　邵平　能く我に就きて
　　開徑翦蓬麻　　径を開き　蓬麻を翦（き）るか

まず「南山」については、ほとんどの注釈が襄陽の峴山としており、ここでもそれに従う[(9)]。「林閭」は郊外の林野の住まい、ここでは孟浩然の荘園を指す。南山を峴山とするならば、前掲の「澗南園」と考えてよいであろう。ここでも、自らの荘園が「北郭（北にある町、襄陽県城）」から遠く離れていることが示されている。また次には、その荘園が、先祖が残した産業であることも示されている。この態度は、上の二つの詩に通ずる。なお後半は、秦の東陵侯・召平の故事（『史記』巻五三・蕭相國世家）に借りて、孟浩然が、瓜を育てるのに老練な隣人に対してその植え方を教えてほしいと願うという意味であろう。そこには農事を真に楽しむ脱俗的な交遊の様子が見て取れよう。

このように、孟浩然詩には、先祖からの荘園を継承し、繁華で喧噪の都市・襄陽から隔絶した場所に自らを位置づけ、さらにはその場所において脱俗的な処世を楽しむ態度が見られる。このいわば都市忌避の態度が、開元十六年の長安における科挙落第にからんで、長安・洛陽に対する都市嫌悪の態度に連なっていると考えられるが、それについては前稿に譲る。

本稿で問題とする「過故人莊」詩の舞台は孟浩然の荘園ではなく、友人の荘園ではあるが、孟浩然にとって脱俗的な交遊が語られる本詩に見られる遠景の「郭」は、以上のような文脈に置くとき、それは「町、町の城壁」であると論者は考えるのである。

なお「過故人莊」詩の制作背景を探ることは困難であるが、論者は、襄陽の作品ではないかと考えている[(10)]。その理由を簡単に述べる。「題張野人園廬」（267頁、223）を掲げる。

　　與君園廬並　　君と園廬並び
　　微尚頗亦同　　微尚　頗る亦た同じ
　　耕釣方自逸　　耕釣　方に自ら逸なり
　　壺觴趣不空　　壺觴　趣　空ならず
　　門無俗士駕　　門には俗士の駕無く
　　人有上皇風　　人には上皇の風有り
　　何必先賢傳　　何ぞ必ずしも　先賢伝
　　唯稱龐德公　　唯だ龐德公を称せん

この詩は、末尾の「先賢傳」（ここでは西晋・皇甫謐『高士傳』（巻下）、東晋・習鑿歯『襄陽耆舊記』などを指す）にて称せられる龐德公が後漢の襄陽の隠士であることから襄陽の作であると判断されるが、ここに描かれた「園廬（荘園の屋敷）」を「並」べる張野人との脱俗的な交遊は、前掲「南山…」詩で「隣家」である「老圃」と農事を楽しむ姿に通ずる。そして、それらはとりもなおさず「過故人莊」詩の友人との交遊に共通するという点において、この詩も襄陽の作であり、したがって「故人莊」も孟浩然の住まいから比較的近くにあったと考えたい。以上の考えは「過故人莊」詩が襄陽の作であるとする強い根拠には必ずしもならない。しかしそこに描かれた交遊は、孟浩然の郷里においてこそのものであると考える。

二

本節では、「過故人荘」詩の「郭」の解釈について、論者が目睹した文献を説ごとに分類して紹介する。ここでは、孟浩然詩の諸注釈、該詩がとられた『唐詩三百首』を中心とする選集の諸注釈、該詩を取り扱った諸論文等を対象とした。なお中国で出版された『唐詩三百首』の注釈はかなりの数にのぼるので、ここでは論者の手許にあるものだけに限定した。それでもなお大体の傾向を知ることはできるはずである。

（１）「郭」を町・町の城壁とする説

＊語釈や訳注で「城郭」「城壁」「城」「外城」「城牆」などと解釈されているものを列挙する。なお「青山郭外斜」の情景の解釈が、必ずしも妥当とは思われないものも含めている。

＜孟浩然詩の注釈書＞

1) 李小松『孟浩然韋応物詩選』／2) 李景白『孟浩然詩集校注』／3) 徐鵬『孟浩然集校注』／4) 葛傑『王維孟浩然詩選注』／5) 袁閭琨『全唐詩広選新注集評』第２巻／6) 章池『中国古典文学精品屋・王維　孟浩然』／7) 劉寧『王維孟浩然詩選評』／8) 葛景春『王孟体詩選』

＜唐詩三百首等の注釈＞

9) 塩谷温『唐詩三百首新釈』（弘道館、1929年）／10) 前野直彬『唐代詩集（下)』（平凡社、1970年）／11) 中国社会科学院文学研究所古代文学室唐詩選注小組『唐詩選注』上冊（北京出版社、1978年）／12) 金性堯『唐詩三百首新注』（上海古籍出版社、1980年）／13) 孟慶文『新唐詩三百首賞析』（南海出版公司、1995年）／14) 左鈞如『唐詩三百首辞典』（漢語大詞典出版社、1998年）／15) 史良昭等『唐詩三百首（図文本)』（上海古籍出版社、1999年）／16) 趙昌平『唐詩三百首全解』（復旦大学出版社、2006年）

＜論文＞

17) 林庚「談孟浩然《過故人荘》」（北京『語文学習』1957－2）／18) 丁丕行「談唐詩“過故人荘”“燕歌行”“白雪歌送武判官帰”」（華東師範大学『語文教学』1957－2）／19) 王吉明「孟浩然的《過故人荘》」（『陝西教育』1983－1）／20) 徐紹仲「古詩二首浅談」（『瀋陽師範学院社会科学学報』1984－１）／21) 韓幗英「純情一曲唱田園―孟浩然《過故人荘》賞析」（『河北大学成人教育学院学報』2001－1）／22) 文達三「関于“斜”字的注解、表現性及其他―新編中学語文教材批判之一：《過故人荘》読後」（『海南師範学院学報（人文社会科学版)』2001－2）／23) 駱玉明「平淡中的深意―談孟浩然《過故人荘》」（河南教育報刊社『中学生閲読（初中版)』2003－2）／24) 余映潮・王世発「律詩二首《過故人荘》《遊山西村》教学案例」（湖北大学『中学語文』2003－23）／25) 聞捷「情景交融　恬淡清新―孟浩然《過故人荘》賞析」（遼寧人民出版社『課外語文（初中)』2005－9）／26) 谷明貴「《過故人荘》的景与情」（華中師範大学『文学教育（下)』2007－2）

さて上記の論著の中で、論者が特に注目したのは次の指摘である。

まず、17)林氏の論文には、次の通りある。

“緑樹村辺合，青山郭外斜”，不但写出了層次分明的近景和遠景，而且這囲繞着村落的緑樹与斜倚在緑樹之外的青山，正是相映成趣地表現為一種諧和而単純的美。……那緑樹像母親的温柔，懐抱着這個村落；而那青山像一個崗哨，遠遠地也注視着這個村落。它們的心全在這個村落上，因而那城郭也就被冷落地丟在一辺了。這裏我們才明白，既然説“緑樹村辺合”，已経是在城郭之外了，為什麽還要説“青山郭外斜”呢？這詩句正在于陪襯出那城郭的不重要来；青山、緑樹、村落，那麽水乳交融地打成一片，那城郭就只好若有無地黙黙站在一辺，這真是再親切也没有的一幅図画。

（「緑樹村辺合、青山郭外斜」は、近景と遠景をはっきりとした構成で描き出しているだけではなく、村を取り囲む緑樹と緑樹の向こうに斜めに寄りかかる青山が、まさにコントラストをなして趣を持ち、調和と純粋の美を表現している。……緑樹は母のような穏やかさでこの村を包み、青山は見張りの兵士のように遠くからこの村を見守っている。緑樹と青山の

心は全てこの村にあり、そのため城郭も冷たく片隅に放っておかれているのだ。ここで次のことが明らかになる。「緑樹村辺合」と言うからには、既に城郭の外にあることになるのに、なぜさらに「青山郭外斜」と言わなければならないのか。この詩句はほかでもなく、城郭が重要でないことを強調しているのである。青山、緑樹、村落が水と乳が溶けあうように一つとなり、城郭は存在しないかのように黙って片隅に立つだけしかない。これは、本当にこれ以上はない親しみ深い絵画なのである。）

また23)駱氏の論文には、次の通りある。

値得注意的是“郭”即城牆的出現：城市意味着另外一種完全不同的生活，那裏俗塵飛揚，是人們為権力、栄誉、物質享楽而紛争不已的場所，如今它被青山隔断。但在詩裏面，它又好像只是作為“青山”的陪襯而順帯地、不経意地出現的；作者没有強調它的存在，但倘要是注意到了，它就是有内涵的。

（注目に値するのは「郭」つまり城牆（城壁）が現われることである。城市は別個の全く異なる生活を意味し、そこは俗塵が飛び交い、権力・栄誉・物質的享楽のために人々の争いが絶えない場所であるが、今は青山に遮断されている。しかし詩の中では、郭は「青山」の引き立て役として、ついでに、無意識に現われただけのようでもある。作者はその存在を強調してはいないが、もし注意するならば、郭はこのような内包を持つのである。）

上記の二つの論文は、ともに、「郭」が町であり、それがこの詩において友人の荘園と対照的な、重要ではない存在、世俗の象徴たる存在として解釈されている点で、前述の論者の考えに通ずる。

（２）「郭」を村の防壁・障壁などとする説

＊明確に村の防壁・障壁などと解釈しないものもでも、釈文の文脈から判断した場合がある。

＜孟浩然詩の注釈書＞

1) 厳紀華『孟浩然詩選』

＜唐詩三百首等の注釈＞

2) 小川環樹『唐詩概説』（岩波書店、1955年）／3) 目加田誠『唐詩三百首２』（平凡社、1975年）／4) 蕭滌非等『唐詩鑑賞辞典』（余恕誠担当、上海辞書出版社、1983年）／5) 石川忠久『中国古典詩聚花　隠逸と田園②』（尚学図書、1984年）／6) 田部井文雄『唐詩三百首詳解上巻』（大修館書店、1988年）／7) 深澤一幸『唐詩三百首』（角川書店、1989年）／8) 艾克利等『唐詩三百首今訳』（三秦出版社、1992年）／9) 増野弘幸・阪口三樹・加藤敏『研究資料漢文学　第三巻　詩Ⅰ』（加藤担当、明治書院、1993年）／10) 朱炯遠等『唐詩三百首訳注評』（遼寧古籍出版社、1995年）／11) 陶今雁『唐詩三百首詳注』（百花洲文芸出版社、1996年）／12) 張忠鋼『唐詩三百首評注』（斉魯書社、1998年）／13) 松浦友久『続校注唐詩解釈辞典〔付〕歴代詩』（田口暢穂担当、大修館書店、2001年）

＜論文＞

14) 田口暢穂「孟浩然「過故人庄」詩をめぐって―王孟田園詩考―」（『鶴見大学紀要（第1部　国語・国文学篇）』18、1981年）／15) 羅旭光「情寓于景景為情設―《過故人荘》賞析」（『山西師院学報（社会科学版）』1983－2）／16) 田口暢穂「孟浩然「過故人荘」詩をめぐって―「故人具雞黍」の典拠―」（『創立三十周年記念鶴見大学文学部論集』、1993年）／17) 李世洪「語淡而味終不薄―談孟浩然《過故人荘》的韻味」（『成都教育学院学報』2001－2）／18) 劉漢華「平淡中見神韻　随意処見精神―孟浩然《過故人荘》導読」（南京師範大学『文教資料（初中版）』2005－1）／19) 王巧花「語淡而味不薄―孟浩然《過故人荘》賞析」（河北省出版総社報刊服務中心『閲読与鑑賞（初中版）』2006－Z2）／20) 伊人「恬淡親切　情味深長―読孟浩然的《過故人荘》」（上海教育報刊総社『当代学生』2007－10）

上記の論著の中では、既に挙げた小川氏の解釈が注目され、特に以後の本邦のほとんどの解釈がこれを襲っているようである[11]。また11）陶氏の注釈には「郭:指村荘的四周及外部。這裏不作“外城”解。（郭は、村荘の周囲と外部を指す。ここでは「外城」とは解さない。）」とあり、敢えて「外城」（町の城壁）と解釈しないことに言及するのは、「郭」を村の周囲の障壁とする解釈が特殊であることを示しているの

ではなかろうか。

（３）「郭」について言及しないもの、解釈が不明瞭なもの

＜孟浩然詩の注釈書＞

1) 游信利『孟浩然集箋注』／2) 陳貽焮『孟浩然詩選』／3) 蕭継宗『孟浩然詩説修訂本』／4) 曹永東・王沛霖『孟浩然詩集箋注』／5) 王達津『王維孟浩然選集』／6) 趙桂藩『孟浩然集注』／7) 梁志林・焦国章『王維孟浩然詩歌精選』／8) 佟培基『孟浩然詩集箋注』／9) 陳貽焮『増訂注釈全唐詩』第１冊／10) 陳鉄民『王維孟浩然詩選』

＜唐詩三百首等の注釈＞

11) 清・章燮『唐詩三百首注疏』（呉紹烈・周芸校点本、安徽人民出版社、1983年）／12) 清・陳婉俊『唐詩三百首補注』（中華書局、1959年）／13) 民国・俞陛雲『詩境浅説』（北京出版社、2003年）／14) 喩守真『唐詩三百首詳析』（中華書局、1959年）／15) 王歩高『唐詩三百首匯評』（東南大学出版社、1997年）／16) 林庚『中国歴代詩歌選・唐五代』（清華大学出版社、2006年）／17) 林庚『林庚推薦唐詩』（陳貽焮担当、清華大学出版社、2006年）

＜論文＞

18) 鄭沛徳「“故人”“田家”辨疑―《過故人荘》評価復議」（内蒙古師範大学中文系『語言文学』1983－3）／19) 周懋昌「迷人的田野風光　酔人的泥土芳香―《過故人荘》、《遊山西村》対読」（『文史知識』1995－1）／20) 柳銀鳳「比較閲読在課堂中的運用―《過故人荘》和《遊山西村》課堂実録」（山西省教育学院『教学与管理』2002.2.20）／21) 張会恩「田園美景　隠士真情―読孟浩然《過故人荘》」（河北省出版総社報刊服務中心『閲読与鑑賞（高中版）』2002－10）／22) 馬慧芳「真情実感出好詩―《遊山西村》和《過故人荘》比較談」（哈爾浜師範大学『語文天地』2003－15）／23) 石楊「寒倹之態　天然而工―従“故人荘”、“香積寺”看王孟詩風之異」（『貴州大学学報（社会科学版）』2004－3）／24) 胡軍（編絵）「過故人荘」（江西省科学技術協会『聡明泉（少児版）』2004－7）／25) 秦玥「《過故人荘》―片段表演」（山西師範大学『語文教学通訊』2005－5）／26) 謝忠義「《過故人荘》課件賞析」（教育部中央電化教育館等『信息技術教育』2005－7）／27) 国文成・宋玲玲「一曲新詞酒一杯―課件《過故人荘》点評」（教育部中央電化教育館等『信息技術教育』2005－7）／28) 朱花東「譲語文課堂詩意流淌―《過故人荘》教学実践与思考」（吉林市『青年教師』2005－9）／29) 陶冬紅「談《過故人荘》中的一個典故」（曲阜師範大学『現代語文（文学評論版）』2006－1）／30) 徐永庚「自然平淡　意味醇厚―孟浩然《過故人荘》賞析」（安徽省教育報刊社『初中生必読』2006－5）／31) 馬丕環「“浅之至而深，淡之至而濃”―孟浩然詩《過故人荘》欣賞」（広西語言文学学会等『閲読与写作』2006－6）／32) 呉漢江「語義双関，意猶未尽―《過故人荘》中“就菊花”別解」（教育部語言文字報刊社『語文建設』2007－12）

論文の場合は、その目的によって必ずしも「郭」の解釈に言及するものではないけれども、「郭」についての解釈が示されない或いは不明瞭である論著がこのように多数にのぼるということ、とりわけ比較的多くの孟浩然詩の専門的注釈書において解釈が示されていないことは、「過故人荘」詩の「郭」の解釈の難しさを示しているものと判断されよう。

また、該詩が初級中学校の教材とされていることが、26)謝氏論文、27)国氏・宋氏論文において示されている[(12)]。28)朱氏論文は該詩の教案であり、そのような文章においても「郭」の解釈が示されないこと、つまり、該詩が比較的基礎的な教材であるにもかかわらず、その教授において「郭」解釈を避けるということは、これについての解釈に定論がないことを物語っていよう。（なお（１）24）余氏等の教案には解釈が示されている。）

次に、24)胡氏のものは論文ではなく、「過故人荘」詩を５コマ漫画として茶化し、孟浩然と友人との再会の時に地球が温暖化していたというオチをつけたものだが、頷聯を描くコマを含めて、城郭も村の防壁も描かれていない。30)徐氏論文に付された図画においても屋敷を囲む低い柵らしきものが

わずかに描かれるだけであり、また「郭」を「外城」とする（１）の15)史氏等『唐詩三百首（図文本)』の図画にあっても屋敷を囲む背の低い柵が描かれるのみであり、ともに城郭も村の防壁も描かれていない。漫画を含めて該詩を図像化したものに、城郭あるいは村の防壁が描かれていないのは、やはり「郭」解釈に定論のないこと、解釈の難しさを示していると考えられる。

三

本節では「過故人莊」詩以外の孟浩然詩に見られる「郭」について検討する。

第一節に掲げた「澗南園即事貽皎上人」（79頁、59)・「南山下與老圃期種瓜」（270頁、226）の「郭」は、前述の通り襄陽県城と考えてよいであろう。これらのほかに孟浩然詩には「郭」字が８例見られる。

①「與黄侍御北津泛舟」（81頁、61）

津無蛟龍患、日夕常安流。本欲避驄馬、何知同鷁舟。豈伊今日幸、曾是昔年遊。莫奏琴中鶴、且隨波上鷗。堤緣九里郭、山面百城樓。（堤は縁る　九里の郭、山は面す　百の城楼。）自顧躬耕者、才非管樂儔。聞君薦草澤、從此泛滄洲。

ここの「九里郭」については、孟浩然詩の諸注釈書[13]において、襄陽県城の城壁とされ、また「堤」は「大堤」とする。ちなみに大堤は、唐代にあっては、「襄陽の城を西北から東南にめぐり流れる漢江ぞいを中心とする長大な堤防付近」に栄えた「妓楼街」の名称でもある[14]。詩題の「北津」も諸注釈において襄陽県城北の渡し場とされる。なお「百城樓」については、「百城の楼」と訓むと意味が通じにくいので「百の城楼」と訓み、襄陽県城のあまたのたかどのを指すと考えたい。もとより「北津」「堤」「九里郭」「百城楼」は固有の名称ではないので、これらによって襄陽の作に比定することは完全にはできないが、孟浩然の事跡から考えた場合、襄陽の作とするのは妥当であろう。さらに白居易「寄微之三首」其二（『全唐詩』巻四三三・13-4790）[15]において「君遊襄陽日、我在長安住。今君在通州、我過襄陽去。襄陽九里郭、樓堞連雲樹。」と歌われていることからも、それは裏付けられよう。またたとえ襄陽の作ではないとしても、この詩の「郭」が町の城壁であることは間違いないと考えられる。

②「峴山送朱大去非遊巴東」（103頁、76）

峴山南郭外、送別毎登臨。（峴山　南郭の外、送別　毎に登臨す。）沙岸江村近、松門山寺深。一言余有贈、三峽爾相尋。祖席宜城酒、征途雲夢林。蹉跎遊子意、眷戀故人心。去矣勿淹滯、巴東猿夜吟。

この詩では冒頭に「峴山」とあり、これは第一節で示したとおり襄陽県城の南方の山であるので、「南郭」は襄陽県城の南（の城壁）と解釈して間違いない。またこの詩は、孟浩然自身の住まいである澗南園附近で友人を送ったものであるが、冒頭四句、「送別」において「毎(つね)に」その場として選んだ「峴山」とその近くの「江村」「山寺」は、「郭」の喧噪に対して静かに存在するものとして読むことができよう。

③「峴山送蕭員外之荊州」（142頁、104）

峴山江岸曲、郢水郭門前。（峴山　江岸の曲、郢水　郭門の前。）自古登臨處、非今獨黯然。亭樓明落日、井邑秀通川。澗竹生幽興、林風入管絃。再飛鵬激水、一舉鶴沖天。佇立三荊使、看君駟馬旋。

前の詩と同様に峴山における送別のうたである。第二句目の「郢水」は、蕭員外が向かう荊州の治所・江陵県（湖北省江陵県）すなわち春秋戦国の楚の都である郢の方へと流れてゆく川という意味で、ここでは諸注釈が説くように「漢水」であろう[16]。であるならば、「郭門」の「郭」は漢水を北に臨む襄陽県城と考えてよいであろう。なお実際には、漢水が襄陽から江陵に流れ至るわけではないが、送別の地と蕭員外の向かう地を「峴山」「郢（水)」として対にした詩的表現としてここは捉えるべきであ

ろう。

以上の３例は、「郭」を襄陽県城（の城壁）と解することができるものであった。以下、それ以外の例を作品番号順に挙げてゆく。

④「晩泊潯陽望香爐峯」（66頁、47）

挂席幾千里、名山都未逢。泊舟潯陽郭、始見香爐峯。（舟を泊す　潯陽の郭、始めて見る　香爐峯。）嘗讀遠公傳、永懷塵外蹤。東林精舍近、日暮空聞鐘。

この詩の「郭」は、江州の治所・潯陽県（江西省九江市）の町であることに異論はなかろう。また敢えて言うならば、孟浩然の意識は、潯陽の町ではなく、脱俗の地である廬山・東林寺にのみに向けられているのである。

⑤「行至漢川作[17]」（130頁、95）

異縣非吾土、連山盡綠篁。平田出郭少、盤壠入雲長。（平田　郭を出づれば少なく、盤壠　雲に入りて長し。）萬壑歸於海、千峯劃彼蒼。猿聲亂楚峽、人語帶巴鄉。石上攢椒樹、藤間養蜜房。雪餘春未暖、嵐解晝初陽。征馬疲登頓、歸帆愛渺茫。坐欣沿溜下、信宿見維桑。（坐ろに欣ぶ　溜に沿って下れば、信宿　維桑を見んことを。）

詩題の「漢川」については、ほとんどの注釈が「漢水」としている。末二句に、このまま川を下って船旅を続けると二晩で郷里が見えて来るであろうことが歌われているので、外地への旅遊から孟浩然が漢水を下って帰る時の作品であると考えられる。そしてここの「郭」も、これに言及する注釈がそうであるように町、城郭と考えてよいであろう。加えて論者は、三・四句目を五言排律の対句としてみた場合、「平田」と「盤壠（曲がりくねって続く棚田）」、「少」と「長」がはっきりと反対概念として対になっているので[18]、「雲」と対となる「郭」は村ではなく町の意味であると考えたい。そして三・四句目以後は、町（おそらく山の麓の町）を出て、山あいの道を進み、そして山道を抜けて、漢水に出たということであろう。

⑥「久滯越中贈謝南池會稽賀少府」（131頁、96）

陳平無産業、尼父倦東西。負郭昔云翳、問津今已迷。（陳平　産業無く、尼父　東西に倦む。負郭　昔云に翳れ、問津　今　已に迷う。）未能忘魏闕、空此滯秦稽。兩見夏雲起、再聞春鳥啼。懷仙梅福市、訪舊若耶溪。聖主賢爲寶、卿何隱遁棲。

この詩の冒頭四句は、孔子の「問津」の故事（『論語』微子篇）と、漢の陳平が産業につとめず、陽武県戸牖郷（河南省中牟県北）の城壁近くの窮巷（スラム街）、すなわち「負郭」に住んでいた故事（『史記』巻五十六・陳丞相世家）を歌う。なおこの場合の「負郭」は「負郭の田」とは逆で、城壁の外側ではなく城壁の内側の窮巷である[19]。

⑦「題李十四莊兼贈綦母校書」（183頁、142）

聞君息陰地、東郭柳林間。左右瀍澗水、門庭緱氏山。（聞く　君が息陰の地は、東郭　柳林の間にありと。左右には瀍澗の水、門庭には緱氏の山。）抱琴來取醉、垂釣坐乘閒。歸客莫相待、緣源殊未還。

三・四句目の「瀍澗水」は瀍水（洛陽の北、河南省孟津県から洛水に流れ込む川）と澗水（河南省澠池県の東北から穀水に流れ込む川、穀水は洛陽の西で洛水に合流する）のことであり、それぞれ洛陽の北、洛陽の西を流れる。「緱氏山」は、河南府緱氏県（河南省偃師県南）の東南で[20]、洛陽の東側にあたる。文字通に解すると一句目の「息陰地」（「李十四莊」を指していよう）は、地理的に洛陽の西と東のどちらに位置するか分からなくなってしまうが、ここでは深く立ち入らない。少なくとも三・四句目から、二句目の「東郭」が、町の（城壁の）東すなわちここでは洛陽の東を意味することは間違いないであろう。

⑧「登安陽城樓」（278頁、235）

縣城南面漢江流、江嶂開成南雍州。才子乘春來騁望、羣公暇日坐銷憂。樓臺晚映青山郭、羅綺晴嬌綠水洲。（楼台　晩に映ず　青山の郭、羅綺　晴に嬌し　緑水の洲。）向夕波搖明月動、更疑神女弄珠遊。

この詩の「青山郭」の「郭」は、詩題と第一句目にある安陽県城と考えて間違いなかろう。「樓臺」「羅綺」の句はそれぞれ、安陽城壁の楼から眺めた城内の風景、城外の風景として対をなしている。また「青山郭」の意味は、山沿いの町というふうな意味であるが、孟浩然詩において「青山」と組み合わされた「郭」が、ここでも町の意味であることは注意しておいてよかろう。なおここの「安陽」については、諸注釈において様々な地に比定されているがここでは触れない[21]。

以上、「過故人莊」詩以外の孟浩然詩における「郭」の意味について検討してきたが、そのいずれも、町、町の城壁と解釈できるものであると考えられる。

四

孟浩然詩における「郭」の用例については前節のごとくであった。本節では、唐以前の詩歌に見える「郭」について概観する[22]。

まず『詩經』には、「郭」の用例は見られない。

次に『楚辭』では、宋玉「九辯」第九段（洪興祖補注本による分段）に「棄騏驥之瀏瀏兮、馭安用夫強策。諒城郭之不足恃兮、雖重介之何益。（諒に城郭の恃むに足らざれば、介（よろい）を重ぬと雖も何ぞ益せん。）」とあり、ここは「城郭」と熟しており、町の城壁の意味である。先秦詩にこのほかの用例はない。

次に漢魏六朝の用例を見てみる[23]。用例は50弱であった。以下、注意すべき例を中心に検討してゆき、同様の用例については問題のない限り再び触れることはしない。

まず漢詩を見る。「戰城南」（『漢詩』巻四・157頁）「戰城南、死郭北。（城の南に戦い、郭の北に死す。）」にとあるのは、「城郭の南北（まわり）で戦って死んだ」ということを二句に分けて表現しているので、ここの「郭」は城郭、町という意味である。なお「城郭」と熟する用例が、蔡琰「悲憤詩」（巻七・200頁）、「古詩爲焦仲卿妻作並序」（巻十・286頁）に見られる。

「古詩十九首」其十三（巻十二・332頁）には「驅車上東門、遙望郭北墓。（車を上東門に駆り、遙かに郭北の墓を望む。）」とある。「上東門」が『文選』（巻二三）の阮籍「詠懷詩十七首」其十「步出上東門」の李善・呂向注に従えば、洛陽の東側の三つの門のうち最も北側のものを指し[24]、これによるとここの「郭」は洛陽の城郭である。また「古詩十九首」其十四（同）には「出郭門直視、但見丘與墳。（郭門を出でて直（ただ）ちに視れば、但だ丘と墳とを見るのみ。）」とある。『文選』（巻二九）の本詩の李善注に『白虎通』崩薨篇「葬於城郭外何。死生別處（李善注では「異別」に作る。四部叢刊本によって改める。）、終始異居。（城郭の外に葬るは何ぞや。死生処を別にし、終始居を異にすればなり。）」を引いており、そこに「城郭」とあるのによれば、ここの「郭」も城郭である。

魏詩では「城郭」の例が王粲「從軍詩五首」其五（『魏詩』巻二・362頁）、應璩「百一詩」（巻八・471頁）に見える。曹操「薤露」（巻一・347頁）では「洛城郭（洛城の郭）」とある。阮瑀「駕出北郭門行」（巻三・378頁）「駕出北郭門、馬樊不肯馳。（駕して北郭の門を出づれば、馬　樊として肯えて馳せず。）」の「郭」も城郭と考えてよいだろう。

晋詩では、左思「詠史詩八首」其七（『晋詩』巻七・734頁）に「陳平無産業、歸來翳負郭。（陳平産業無く、帰り来たりて負郭に翳（かく）る。）」と第三節で紹介した陳平の故事が歌われ、「負郭」が詩語として初めて現われる。また張協「雜詩十首」其七（巻七・746頁）に「此鄉非吾地、此郭非吾城。（此の郷は吾が地にあらず、此の郭は吾が城にあらず。）」とある下句では「郭」＝「城」として用いられている。

宋詩になると「郭」を用いた詩語が増える。謝霊運「富春渚詩」（『宋詩』巻二・1160頁）「宵濟漁浦潭、旦及富春郭。（宵に済る　漁浦の潭、旦に及ぶ　富春の郭。）」では、謝霊運の事跡と個別具体に結びついた「富春郭」という言葉が見える。「富春」は県名で富陽県（浙江省富陽県）、「郭」はその城郭、町を言う[25]。

荀昶「擬相逢狹路間」（巻五・1217頁）には「飛樓臨名都、通門枕華郭。（飛楼　名都に臨み、通門　華郭

に枕(のぞ)む。)」とある。全体の引用は避けるが、「飛樓」「通門」がこの楽府の主人公が出会った男だての屋敷で、「華郭」は、趙の都、繁華な邯鄲の町を指している。

顔延之「還至梁城作詩」(巻五・1234頁)には「故國多喬木、空城凝寒雲。丘壟填郛郭、銘誌滅無文。(丘壟　郛郭に填(み)つるも、銘誌　滅(き)えて文無し。)」とあり、「丘壟」が墳墓、「郛郭」は外城(町の外側の城壁)のことで、ここは詩題の梁城(河南省開封市)をいう。同じ顔延之の「秋胡行九章」第二章(巻五・1229頁)には「驅車出郊郭、行路正威遲。(車を駆りて郊郭を出づれば、行路は正に威遲たり。)」とあり、妻が夫・魯の秋胡子の仕官の旅立ちを送る場面である。「郊郭」は『漢語大詞典』によれば「城外，郊外。」とあり、『文選』(巻二一)の訳注も同様の解釈をする[26]。ここで唐以前の詩に見られる「郊郭」の他の二例を挙げれば、梁・何遜「秋夕歎白髮詩」(『梁詩』巻九・1697頁)「郊郭勤二頃、形體憇一廡。(郊郭　二頃に勤め、形体　一廡に憩う。)」の上句は町の郊外のわずかの土地を精勤に耕すことを言い、北周・王褒「送觀寧侯葬詩」(『北周詩』巻一・2339頁)「今晨向郊郭、猶似背轘轅。(今晨　郊郭に向かい、猶お轘轅に背くに似たり。)」の上句は詩題の「觀寧侯」が町の郊外に葬送されるのを描くと考えてよいであろう。

逸詩である顔延之「獨秀山詩」(巻五・1238頁)に「未若獨秀者、嵯峨郭邑開。(未だ若かず　独秀たる者、嵯峨　郭邑の開くるに。)」とある。これは『太平御覽』(巻四九)所引『桂林風土記』の「獨秀山在城西北一百歩。直聳五百餘尺、周廻一里。……宋光祿卿顔延年牧此郡、常於北石室中讀書。遺跡猶存。嘗賦詩云「未若獨秀者、嵯峨郭邑開。」是也。」に見えるもので、顔延之が始安郡(広西壮族自治区桂林市)の太守となったときの詩である[27]。「郭邑」は『風土記』の冒頭から見るに始安郡の郡城と考えられる[28]。

南斉詩では謝朓「遊東田詩」(『齊詩』巻三・1425頁)に注目しなければならない。詩の本文は「戚戚苦無悰、攜手共行樂。尋雲陟累榭、隨山望菌閣。遠樹曖阡阡、生煙紛漠漠。魚戲新荷動、鳥散餘花落。不對芳春酒、還望青山郭。(芳春の酒に対(むか)わず、還(かえ)りて青山の郭を望む。)」であり、末句の「青山」と「郭」の組み合わせが、問題としている孟浩然「過故人莊」詩の「青山郭外斜」句が依拠するところのひとつとも考えられるからである。詩題の「東田」は首都建康(南京市)の東北にある鍾山の東の地名。本詩はそこにあった謝朓自身の別荘への行楽をうたっている。以下、「青山郭」の「郭」について便宜的に論者の手許にある注釈書の説を整理する。山のほとりの村・村里とするのが、花房英樹『文選(詩騒篇)三』(集英社、1974年)、伊藤正文等『漢・魏・六朝詩集』(伊藤担当、平凡社、1972年)、松枝茂夫『中国名詩選(中)』(岩波書店、1984年)。特に花房氏は「「郭」は村里の囲い。」と注す。一方、星川清孝『古詩源　下』(集英社、1965年)は「青い山の端の城郭」とし、人民文学出版社編輯部『漢魏六朝詩歌鑑賞集』(潘慧恵担当、人民文学出版社、1985年)[29]は「東田一帯的青山、城郭」とし、松浦友久『中国名詩集』(朝日新聞社、1992年)は「青い山々のかなたの郭(まち)」とする。入谷仙介『古詩選(下)』(朝日新聞社・文庫版、1978年)は「郭」を「山をひかえた」「城壁にかこまれた村や小都会[30]」と説明し、張秉戌『山水詩歌鑑賞辞典』(黄樹則担当、中国旅游出版社、1989年)は「山郭(『漢語大詞典』は「山郭」を「山城；山村。」と釈す。)」とする。陰法魯等『昭明文選訳注　第三冊』(吉林文史出版社、1992年)は「青山郭」を「如城郭一様連綿的青山(城壁のように連綿と連なる青い山)」と解する。森野繁夫『謝宣城詩集』(白帝社、1991年)は「郭」自体の説明はないが、「青山郭」を「我が家」と訳し、謝朓の故郷[31]としている。馬茂元等『先秦漢魏六朝詩鑑賞辞典』(寇效信担当、三秦出版社、1990年)は「郭外的青山」とする。陸著が「郭」を青山の比喩的表現と解し、森野氏が「郭」自体の解釈に言及しない[32]のは、この詩の「郭」解釈の難しさを示していよう。ここの「郭」については、村・村の防壁、町・町の城壁の二説が存在することになる。

ここで六朝時代の村落形態に言及した歴史研究に目を転じてみよう。宮崎市定「中国における聚落形体の変遷について」(注(19)参照)、中村治兵衛氏・谷川道雄氏による宮崎氏の一連の論考の簡潔な要約[33]、また愛宕元『中国の城郭都市』第五章「魏晋南北朝時代の城郭都市」(中央公論社、1991年)によれば、秦漢時代において農村聚落は城郭に囲まれていた集村、農業都市であり、つまり農民も城

郭内に居住していたが（耕地は城郭外にあった）[34]、漢帝国の崩壊過程に、農民は、さまざまの契機によって、都市を離れ、山野に新たな聚落を形成する。すなわち後漢末から三国晋の動乱によって、臨時的な塢の流行と、恒久的な村の成立という二つの新傾向が引き起こされる。この塢とは山の自然の要害を利用した強固な土壁や土塁をもつ城塞的聚落であり、村とは防壁を持たない無防備な平地の散村（分散村落）である。散村化の傾向は、魏晋期以降さらに加速する。一方で、三国の分裂抗争、五胡十六国期、南北朝の分裂という動乱の時代に塢が臨時的に登場する、ということである。また宮川尚志『六朝史研究　政治・社会篇』第七章「六朝時代の村について」（平楽寺書店、1956年）では、六朝時代の村について、「何程かの障壁を有し」た平地の村（耕地は障壁外）[35]と自然の障碍物を恃み散居した山谷の村との二種類に区別できると述べている。

宮崎氏らの説と宮川氏の説は平地の村についての考え方が同じではないが[36]、謝朓詩の「青山郭」が、そののどかな詩の世界からしても、宮崎氏らのいう山の自然の要害を利用した塢とは到底思えないし、またそれが平地の村で宮川氏のいうように何程かの障壁があったとしても、以上の用例に見られた町、城郭の「郭」と表現されるほどのものではないように思われる。歴史研究によって詩の表現を考察することには慎重を期さなければならないが、ここの「郭」もこれまでの用例と同じように城郭、町としておきたい。

次に梁詩であるが、江淹「銅爵妓」（『梁詩』巻三・1555頁）末句に「螻蟻郭」という新しい語彙が見えるほかは、とりわけ注意すべき用例はなく、すべて城郭、町と解してよいと考えられる。北朝の詩においても、同様である。

以上、唐以前の詩歌における「郭」の用例を検討したが、謝朓「遊東田詩」に疑義は残るものの、町、町の城壁の意味で用いられていると判断される。

五

本節では唐詩の用例について、『全唐詩』によって概観する[37]。唐詩における用例は詩題に現われるものも含めて、概数で580例であった。『全唐詩』の詩人の配列は、詩人たちの生卒年との齟齬があるが、ここでは便宜的に巻数に従い挙例する。

用例の検討の前に、唐代の村落の形態についての歴史研究を見るに、村に障壁があったとする立場と、村は自然村落であるとする立場の二つに分かれるようである。宮川尚志氏、曽我部静雄氏、堀敏一氏らは、開元七年・二五年の戸令[38]等に依拠して、村に障壁があったとしている[39]。一方、宮崎市定氏、愛宕元氏、日野開三郎氏は、村は自然集落の散村で障壁がなかったと考えているようであり、中でも日野氏は「（唐代の）州県治は原則として城壁を繞らし、又逆に城壁を繞らしていたのは、辺境の堡寨は別として、一般には県治以上であった」とも述べられる[40]。また日比野丈生氏は「一般の村落が今日のように囲郭をそなえるようになつたのは、案外に新しいことではないかと思う。古来中国で囲郭が発達するのは戦乱時であつて、政府による治安が期待できなくなつたとき、人民が自衛のためにみずから築いたばあいが多い。……したがつて、今日の華北におけるいちじるしい囲郭の発達も、歴史上の波の一頂点にすぎないのであつて、これをもつて華北集落の本質的な姿とすることは、必ずしも当らないのではないかと思う。」と推測されている[41]。

このように、唐代の村の防壁の存在につては、定論がないようであるが、以下、二説あることを踏まえながら、紙幅の関係もあるので、注目される用例に限って検討を加えてゆく。

まず宋之問「春日鄭協律山亭陪宴餞鄭卿同用樓字」（巻五三・2-649）に「潘園枕郊郭、愛客坐相求。（潘園　郊郭に枕（のぞ）み、客を愛して坐（まさ）に相求む。）尊酒東城外、驂騑南陌頭。池平分洛水、林缺見嵩丘。」に、前節で言及した「郊郭」が見える。これは、詩中の「東城外」「洛水」から洛陽城の東郊外という意味であり、唐以前の「城外・郊外」という用法に同じいことがわかる。張説「岳州行郡竹籬」（巻八六・

3-932）冒頭の「山郡不溝郭、荒居無翳壅。（山郡　溝郭せず、荒居　翳壅無し。）」の上句は、張説の左遷の地、岳州の治所・巴陵県城（湖南省岳陽市）について、自然の要害による山城ゆえに堀も城壁もない（不十分である）ことをいうのか。『漢語大詞典』は「溝郭」をここを用例に「護城河与城郭（堀と城壁）」と釈す。詩は以下、高い竹の柵をめぐらせて城壁に代え、安心したことをうたう[42]。州治でも場合によっては城壁が不十分であったということであろうか。

また唐代に入ると、前代の謝霊運「富春渚詩」の「富春郭」のように個別具体的な町の地名と結びついた用例が目立ってくる。『全唐詩』の早い巻に現われる例をいくつか挙げると、呉少微「和崔侍御日用遊開化寺閣」（巻九四・3-1012）「太原郭」、李頎「送劉昱」（巻一三三・4-1356）「揚州郭」、儲光羲「田家雑興八首」其五（巻一三七・4-1386）「南陽郭」、劉長卿「金陵西泊舟臨江樓」其六（巻一四九・5-1531）「金陵郭」、高適「和崔二少府登楚丘城作」（巻二一一・6-2193）「睢陽郭」などである。このことは、「郭」が町、城郭の意味として安定的に用いられていることを示しているのではなかろうか。

次に王維「新晴野望」（巻一二五・4-1250）である。

新晴原野曠、極目無氛垢。郭門臨渡頭、村樹連谿口。白水明田外、碧峯出山後。農月無閒人、傾家事南畝。

（新晴　原野曠（ひろ）く、極目　氛垢無し。郭門　渡頭に臨み、村樹　谿口に連なる。白水　田外に明るく、碧峯　山後に出づ。農月　閒人無く、傾家　南畝を事とす。）

雨上がりの田園風景を描く作品である。手許の注釈書では、「郭門」の「郭」については村の防壁とする説が多い。都留春雄『王維』（岩波書店、1958年）、小川環樹等『王維詩集』（岩波書店、1972年）、入谷仙介『王維』（筑摩書房、1973年）、石川忠久『中国古典詩聚花　隠逸と田園②』。中国の注釈書で「郭門」に言及するものは、外城の門と釈しており、それが村落の防壁の門であるとは言わない。王達津『王維孟浩然選集』、袁閭琨『全唐詩広選新注集評』第２巻、梁志林・焦国章『王維孟浩然詩歌精選』、劉寧『王維孟浩然詩選評』、葛景春『王孟体詩選』（以上、書誌を示さないものは注(1)と第二節を参照）。王維にはもう一つ「郭門」の用例があり、王維「送康太守」（巻一二五・4-1255）「城下滄江水、江邊黄鶴樓。朱闌將粉堞、江水映悠悠。鐃吹發夏口、使君居上頭。郭門隱楓岸、候吏趨蘆洲。（郭門　楓岸に隠れ、候吏　蘆洲に趨く。）何異臨川郡、還勞康樂侯。」は、一句目に「城下」とあるから、「郭門」は町（「黄鶴樓」とあるから、鄂州治江夏県城＝「夏口」、湖北省武漢市）の城壁の門の意味で用いられている。すると「新晴野望」詩の「郭門」も、二句目に「極目」とあるので遠景として存在する町の城壁の門と解釈する可能性は存在していよう。またこれに関して、先の宋之問詩において「潘園」が洛陽の郊外にあることが描かれ、さらには王維「丁寓田家有贈」（巻一二五・4-1248）の「新晴望郊郭、日映桑楡暮。（新晴　郊郭を望めば、日は映ず　桑楡の暮。）陰晝小苑城、微明渭川樹。」において詩題の丁の田家が「郊郭（ここでは長安附近の城外[43]）」にあることが描かれるように、町の郊外に荘園、田園があるという位置関係がうたわれており、これは「新晴野望」詩に通ずるのではなかろうか。このようなことから「新晴野望」詩の「郭」は町、町の城壁と考えたい。一方、この「郭」が村の防壁であるならば、孟浩然「過故人莊」詩の「郭」を同様に解釈する根拠のひとつとなるであろう。

次に、王維の弟王縉の作で王維詩（巻一二七・4-1292）としても重出する「游悟眞寺」（巻一二九・4-1311）には「梵宇聊憑視、王城遂渺然。灞陵纔出樹、渭水欲連天。遠縣分朱郭、孤村起白煙。（遠縣　朱郭分（あきら）かに、孤村　白煙起（た）つ。）」とある。詩題の悟真寺は、趙殿成『王右丞集箋注』（巻十二）によれば藍田県東南二十里の王順山にあった寺で、この六句はそこからの遠景を描く。引用末二句の「朱郭」は王維詩では「諸郭」とするが、いずれにせよ、郭によって「遠縣」を象徴的に描写していることから、対比される村には城郭のような防壁はないものと読めよう。

このような郭と村の対比は、次節で論ずる杜牧「江南春」の「水村山郭」を含めて中晩唐にもいくつか見られる。白居易の元和十三年（818）江州（治潯陽県、江西省九江市）での作[44]「題韋家泉池」

（巻四四〇・13-4900）には「泉落青山出白雲、縈村繞郭幾家分。（泉　青山より落ちて　白雲を出で、村を縈（めぐ）り　郭を繞って　幾家にか分かる。）」とあり、岡村繁氏は「滝の水が青山から落ちて、たちこめる白雲の間を通り抜け、村を縈り、町を繞って、幾軒かに分流する。」と訳される[45]。また韓偓「小隠」（巻六八〇・20-7792）に「清晨向市煙含郭、寒夜歸村月照溪。（清晨　市に向かえば　煙郭を含み、寒夜　村に帰れば　月渓を照らす。）」とある。韋莊「齊安郡」（巻六九八・20-8037）には「傍村林有虎、帶郭縣無官。（傍村　林に虎有り、帯郭　県に官無し。）」とあり、「帶郭」は城下、城郭（町）の郊外の意味。これらの「村」も王縉「游悟眞寺」詩と同様、「郭」と対比されており、城郭のような防壁はないものと読めるのではなかろうか。さらに呉融「花村六韻」（巻六八五・20-7863）に「地勝非離郭、花深故號村。（地は勝なれども郭を離るるに非ず、花深く　故に村と号す。）」とあるのは興味深い。郭を離れてはいないけれども村と呼ばれるというのは、村は本来「郭」とは別の存在であること、ひいては村には郭と呼ばれるような障壁がないということを示しているのではなかろうか。また許渾「南樓春望」（巻五二九・16-6052）に「野店歸山路、危橋帶郭村。（野店　帰山の路、危橋　帯郭の村。）」とあるのは、詩題からいずこかの町の城壁の南楼からの景色であり、町の近郊に村があることを示している。さらに、その村には城郭のような防壁があるとは思われない。以上、王縉以下の挙例において、「郭」と対比的に描かれる「村」には防壁がなかったと思われる。少なくとも、防壁が存在したとしてもそれが「郭」と表現されていないことは確かであろう。またこのことは、郭と村を対にして描いている、孟浩然「過故人莊」「綠樹村邊合、青山郭外斜。」や王維「新晴野望」「郭門臨渡頭、村樹連谿口。」の解釈に示唆を与えてくれるのではなかろうか。

さて次に、上の許渾詩に見えた「帶郭」については、それによって荘園の位置を示す例がいくつかある。李頎「晚歸東園」（巻一三四・4-1361）「荊扉帶郊郭、稼穡滿東菑。（荊扉　郊郭を帯び、稼穡　東菑に満つ。）」、秦系「題章野人山居」（巻二六〇・8-2899）「帶郭茅亭詩興饒、回看一曲倚危橋。（帯郭　茅亭　詩興饒（ゆた）かにして、一曲を回り看て危橋に倚る。）」（馬戴詩・巻五五六・17-6457として重出）、杜荀鶴「夏日登友人書齋林亭」（巻六九二・20-7954）「暑天長似秋天冷、帶郭林亭畫不如。（暑天　長（つね）に秋天の冷ややかなるに似たり、帯郭の林亭　画も如かず。）」などであるが、すべて荘園が城郭の近郊にあることを示している。これは、第二節で示した孟浩然がその荘園について「弊廬在郭外」、「弊廬隔塵喧」、「林閭北郭賒」と襄陽県城からの隔たりを強調したのに対して、町からの近さを示した点で、対照的であると言えよう。なお町の近くが便利の地を意味すると考えるならば、孟浩然の場合は、その住まいが町から隔たった辺鄙な土地にあるという謙譲の表現ということにもなるが、論者は、謙譲を超えた意義をそこに認めたいのである。

以上のほか唐代において注目されるのは、次節で扱う「山郭」の対照的な表現として「水郭」「江郭」が見えることである。いくつか例示する。楊凌という人の「潤洲水樓」（巻二九一・9-3305）「野蟬依獨樹、水郭帶孤樓。（野蟬　独樹に依り、水郭　孤楼を帯ぶ。）」の「水郭」は詩題から揚子江沿岸の潤州の治所・丹徒県（江蘇省鎮江市）である。劉禹錫「唐侍御寄遊道林嶽麓二寺詩并沈中丞姚員外所和見徵繼作」（巻三五六・11-4003）「橘洲泛浮金實動、水郭繚繞朱樓騫。（橘洲　泛浮　金実動き、水郭　繚繞　朱楼騫（と）ぶ。）」の「水郭」は、この語に注釈する陶敏等『劉禹錫全集編年校注』（岳魯書社、2003年）によれば、詩題の道林・岳麓二寺が存する湘江東岸の潭州治所・長沙県（湖南省長沙市）を指す。高々とした「朱楼」が描かれているので、相違なかろう。また李紳「宿揚州」（巻四八一・15-5470）「夜橋燈火連星漢、水郭帆檣近斗牛。（夜橋　燈火　星漢に連なり、水郭　帆檣　斗牛に近し。）」の「水郭」は詩題から揚州の治所・江陽県（江蘇省揚州市）である。同じく李紳「過鐘陵余長慶三年除江西觀察使、奉詔不之任。」（巻四八〇・15-5464）には「龍沙江尾抱鍾陵、水郭村橋晚景澄。（龍沙　江尾　鍾陵を抱き、水郭　村橋　晩景澄む。）」とあるが、詩題の「鐘陵」は洪州治所・豫章県（江西省南昌市）の別称で[46]、この町は贛水沿岸にあるので、「水郭」は豫章の町である。

「江郭」の例としては、元稹「酬樂天東南行詩一百韻并序」（巻四〇七・12-4531）の二九・三〇句目に「江郭船添店、山城木豎郛。（江郭　船もて店を添え、山城　木もて郛を豎（た）つ。）」とある。この詩の序に「元

和十年三月二十五日、予司馬通州。」、一・二句目「我病方越吟、君行已過湖。」の注に「元和十年閏六月至通州、染瘴危重。八月、聞樂天司馬江州。」とあり、さらに七・八句目「暗魂思背燭、危夢怯乘桴。」の注に「此後每聯之内、半述巴蜀土風、半述江郷物産。」とあることから、「山城」は元稹の任地、通州治所・通川県（四川省達県市）、「江郭」は白居易の任地、江州・潯陽県（江西省九江市）を指すと考えられる。また詩題中の用例であるが、白居易にも「春末夏初閒遊江郭二首」（巻四三九・13-4883）と題する元和十一年、江州での作があり、岡村繁氏は「晩春から初夏にかけ、川辺の町（江州）をのんびり遊び回ったことを述べた詩である。」と解説される[47]。白居易には宝暦二年（826）蘇州の作「呉中好風景二首」其一（巻四四四・13-4975）「海天微雨散、江郭纖埃滅。（海天　微雨　散じ、江郭　纖埃　滅す。）」の例もあり、ここの「江郭」は言うまでもなく蘇州治所・呉県（蘇州市）の町である。

繁雑にはなったが、以上のような「郭」の用例を見てくると、詩歌における「郭」は、州郡の治などの県城の町やその城壁を意味すると考えられる。町の城壁であるならば相当の規模を有したはずであり（逆に「郭」と称される規模のものを有するのは町であると言うことができ）、その点、村の防壁を「郭」と称するかは、疑義が持たれるのである。

六

本節では唐詩の用例のうち、孟浩然「過故人莊」詩の「青山郭外斜」に関連する表現である「山郭」「青山郭」について検討してみる。

「山郭」の早い用例としてまず、王昌齢「巴陵別劉處士一作巴陵劉處士東齋作」（巻一四〇・4-1428）「劉生隱岳陽、心遠洞庭水。偃帆入山郭、一宿楚雲裏。（帆を偃せて山郭に入り、一宿す　楚雲の裏。）」が挙げられる。この「山郭」は詩題の岳州の治所「巴陵」県城と考えてよく、この町は、前節で挙げた張説「岳州行郡竹籬」では「山郡」と表現されている。以下、いくつか「山郭」が町（城郭、県城）と明確にわかる例を挙げよう。劉長卿「送姨子弟往南郊」（巻一五一・5-1578）には「送君匹馬別河橋、汝南山郭寒蕭條。（君を送りて　匹馬　河橋に別れ、汝南の山郭　寒さ蕭條たり。）」とある。楊世明『劉長卿集編年校注』（人民文学出版社、1999年）は詩題の「南郊」を宋蜀刻本『劉文房集』により「南郡」に作り、汝南郡と釈す。「汝南山郭」は汝南郡（＝豫州）の治所・汝陽県（河南省汝南県）と考えてよかろう。

次に、岑参「宿華陰東郭客舍憶閻訪」（巻一九八・6-2027）「次舍山郭近、解鞍鳴鐘時。（次舍　山郭近く、鞍を解く　鳴鐘の時。）」の「山郭」は詩題から華州華陰県（陝西省華陰県）である。岑参「鳳翔府行軍送程使君赴成州」（巻二〇〇・6-2073）「江樓黑塞雨、山郭冷秋雲。（江樓　塞雨黑く、山郭　秋雲冷たし。）」については、詩題の成州の治所・上禄県（甘粛省西和県西）は西漢水という川に臨み、また『元和郡縣圖志』（巻二二）山南道三・成州・上禄県の項に「仇池山、在（上禄）縣南八十里。壁立百仞、有自然樓櫓卻敵、分置均調、有如人功。上有數萬人家、一人守道、萬夫莫向。其地良沃、有土可以煑鹽、楊氏故累世據焉。」「雞頭山、在（上禄）縣東北二十里。」とあることから、二句は、程使君の赴任する上禄県を、川に臨み山を控える町をとして描いたものである。なお『圖志』の記述にある上禄県城から八十里南の仇池山上の自然の要害に守られた大きな「數萬人家」の集落を「山郭」と解することは、集落に「郭」の存在を示す記述がないことからも、無理があるように思われる。この岑参詩のように「山郭」「江樓」が対となる描写に杜甫「秋興八首」其三（巻二三〇・7-2510）「千家山郭靜朝暉、一日江樓坐翠微。（千家の山郭　朝暉静かに、一日　江樓　翠微に坐す。）」があり、「山郭」は其二に「夔府孤城」とも描かれる夔州の治所・奉節県（四川省奉節県）で、長江沿い、山の麓の町として描かれている。

韋應物「夕次盱眙縣」（巻一九一・6-1961）「人歸山郭暗、雁下蘆洲白。（人帰りて　山郭暗く、雁下りて　蘆洲白し。）」の「山郭」は、淮水に臨み、南に都梁山を控える楚州・盱眙縣（江蘇省盱眙県）を描いたものであろう。また大暦十才子のひとり崔峒「送陸明府之盱眙」（巻二九四・9-3345）「澹浪搖山郭、

平蕪到縣門。（澹浪　山郭を揺るがし、平蕪　県門に到る。）」の「山郭」も詩題から同様に盱眙縣を指す。

貞元元年の進士・羊士諤の下記の三首（すべて巻三三二）は、山郭が明らかに州郡の治所（県城）を指している。「郡中即事三首」其一「曉風山郭雁飛初、霜拂回塘水樹虚。（暁風　山郭　雁飛ぶの初、霜は回塘を払い　水樹虚し。）」（10-3696）、「郡樓晴望二首」其二「一雨晴山郭、驚秋碧樹風。（一雨　山郭晴れ、驚秋　碧樹の風。）」（3701）、「上元日紫極宮門觀州民然燈張樂」「山郭通衢隘、瑤壇紫府深。（山郭　通衢隘（せま）く、瑤壇　紫府深し。）」（3702）。詩題に「郡中」「郡樓」「州民」とあるので、これらの「山郭」はその州郡の治所にほかならない。おそらく羊がいずこかの州郡の長官であったときの作であろう。

柳宗元「遊南亭夜還敘志七十韻」（巻三五二・11-3943）には「虚館背山郭、前軒面江皋。（虚館　山郭に背き、前軒　江皋に面す。）」とある。これは元和三年（808）秋、永州の作とされ[48]、この「山郭」は瀟水に臨み、西側が小高い丘となっている永州の治所・零陵県（湖南省永州市）として間違いない[49]。白居易「西樓夜」（巻四三四・13-4798）「悄悄復悄悄、城隅隱林杪。山郭燈火稀、峽天星漢少。（山郭　燈火稀にして、峡天　星漢少なし。）」は、元和十四年、忠州の作であるが、「山郭」は詩題の「西樓」から眺められた州治・臨江県（四川省忠県）である。岡村繁氏は「山に囲まれた街」と訳される[50]。開成年間の中書舎人の紀唐夫の「送友人歸宜春」（巻五四二・16-6257）に「墅橋喧碓水、山郭入樓雲。（墅橋　碓喧しき水、山郭　楼に入るの雲。）」とある「山郭」は、「友人」が帰る地である袁州の治、宜春県（江西省宜春市）を指すと思われる。またたとえ宜春の町ではなくとも、「樓」を有するので町、城郭であることは確かである。なおこの詩は張喬の作（巻六三八・19-7311）として重出する。

いささか煩雑になったが、このように見てくると、「山郭」が州治の県城など比較的大きな山あいの町という意味で用いられていることが判明する。「山郭」は「青山郭」を除くと、唐詩に詩題の例と重出とを含めて31例あり、そのうち県城と明確に判断できる例を挙げたが[51]、以上のように県城、町の意味として安定的に用いられているならば、他の例も同様ではなかろうか。例えば、著名な杜牧「江南春絶句」（巻五二二・16-5964）「千里鶯啼綠映江、水村山郭酒旗風。」の「山郭」を（防壁で囲まれた）村落と解する注釈が本邦では目立つが[52]、これも松浦友久・植木久行『杜牧詩選』（岩波書店、2004年）が「山郭―山べの町。この郭は、城（平声）の言い換え。」とするように、町、城郭と解してよいのではなかろうか。また、錢起「觀村人牧山田」（巻二三六・7-2615）と題する山間の農業を描いた作品の中に「禾黍入寒雲、茫茫半山郭。秋來積霖雨、霜降方銍穫。中田聚黎甿、反景空村落。（禾黍　寒雲に入り、茫茫たり半山の郭。秋来　霖雨積もり、霜降りて方に銍穫（ちつかく）す。中田　黎甿聚まり、反景　村落空し。）」とあるが、遠景である山の中腹の「山郭」と末句の「村落」とは別物であり、前者は城壁のある町、後者は防壁のない村落として対比的に描かれているのではなかろうか。

「山郭」がおおよそ以上のような意味であるとすると、「青山郭」の「郭」も町、城郭ととらえてよいと思われる。注目すべきものとして、「青山郭」が襄陽県城を意味する例を挙げよう。錢起（錢珝の作ともされる）「江行無題一百首」其五（巻二三九・8-2677）に「行背青山郭、吟當白露秋。（行きて青山の郭に背き、吟ずれば白露の秋に当たる。）風流無屈宋、空詠古荊州。」とある。其二に「江曲全縈楚、雲飛半自秦。峴山回首望、如別故關人。」と襄陽県城の附近の山「峴山」が見え、また田部井文雄氏によればこの紀行詩は襄陽から潯陽（江西省九江市）までの船旅を詠んだものであるので[53]、「青山郭」は襄陽の町と考えて間違いない。なお「古荊州」は田部井氏によると、湖南省江陵県のあたりの楚の地方。次に、孟郊「獻襄陽于大夫」（巻三七七・12-4234）「襄陽青山郭、漢江白銅堤。（襄陽　青山の郭、漢江　白銅堤。）」はまさしく襄陽を「青山郭」と表現している。また劉禹錫「故相國燕國公于司空挽歌二首」其二（巻三五七・11-4022）には「漢水晉山郭、襄陽白銅鞮。（漢水　晋山の郭、襄陽　白銅鞮。）」とあり、『全唐詩』は「晉」に「一作青」と校異を付す。「晉山」では意味が通りにくい。劉詩は孟郊詩と同一人物にかかる作であり[54]、また宋本（巻三十）[55]、四部叢刊本（巻十）が「青山（校異なし）」とすることから、劉詩も「青山郭」としてよいだろう。するとこれも襄陽を「青山郭」とした例と見なせよう。そしてこれらの例は孟浩然詩に依拠する表現ではなかろうか。つまりこれらの詩人によっ

て、孟浩然「過故人莊」詩の「郭」が襄陽県城と解されていたのではなかろうか。

そのほか、羊士諤「寒食宴城北山池即故郡守榮陽鄭鋼目爲折柳亭」（巻三三二・10-3708）「別館青山郭、遊人折柳行。（別館　青山の郭、遊人　折柳行。）」の「青山郭」は詩題に「城北山池」とあるので、青い山のふもとの町であろう。白居易「西行」（巻四五三・14-5125）の「壽安流水館、硤石青山郭。（寿安　流水の館、硤石　青山の郭。）」は、「壽安（同宜陽県）」「硤石（河南省三門峡市東）」がそれぞれ河南府、陝州の県名であり、「青山郭」は硤石の町を指す。李白「遊敬亭寄崔侍御一本作登古城望府中寄崔侍御」（巻一七三・5-1777）の「登高素秋月、下望青山郭。（登高　素秋の月、下に望む　青山の郭。）」は、詩題より宣州治所宣城県（安徽省宣城県）西北の敬亭山に登った時の作であり、「青山郭」は宣城県城を指す。また著名な李白「送友人」（巻一七七・5-1804）「青山横北郭、白水遶東城。」は「青山郭」と熟さないが、この「郭」は東は河川に臨み、北に山がある町、城郭である。

「青山郭」の用例は、李白「送友人」を含めず、重出を含めて14例。町、城郭とするのに決め手を欠くものもあるが[56]、青い山のふもとの町、城郭という意味で用いられていたと考えてよいと思われる。

七

以上、用例の解釈に不安定なものがあることは論者自身否めないところではあるが、詩歌における「郭」が、州治の城郭という規模の大きな町を表わすことに代表されるように、町、町の城壁を意味することが明らかになったのではなかろうか。従って、孟浩然「過故人莊」詩の「青山郭外斜」も「青い山が町（町の城壁）の向こう側に斜めに連なっている」あるいは「青い山が町の外（のこの地）において斜めに連なっている」と訳してよいものと思われる。

ただこう結論を下すには、さらに不安な例がないわけではない。

白居易「早春雪後贈洛陽李長官長水鄭明府二同年」（巻四五一・14-5103）に「獻歳晴和風景新、銅駝街郭暖無塵。（献歳　晴和にして　風景新たなり、銅駝　街郭　暖かくして塵無し。）」とある。太和六年（832）洛陽の作。下句の「銅駝」を坊の名称と考えるならば（銅駝坊は洛陽の北郭の最も南側、洛水沿いにある）、下句は坊の周囲の通りと「郭」を描いていることになる。その場合、この「郭」は坊の障壁を言うのであろうか。また「銅駝」を「街」の名称と考えるならば、「郭」はその「街」の両側の坊の障壁を指しているのであろうか[57]。いずれにせよ、そうだとすれば、坊の障壁規模のものを指して「郭」と称しているのであり、村落に防壁が存在したとすれば、それが「郭」と呼ばれてもおかしくはない。なお「街郭」の例は唐詩ではここ一例のみである[58]。

次に譚邦和「過故人莊」（華中師範大学『高等函授学報（哲学社会科学版）』1996－5）によって知ったことであるが、「過故人莊」詩の「綠樹村邊合、青山郭外斜。」は、馬致遠の散曲「雙調　夜行船」において「利名竭、是非絶、紅塵不向門前惹。綠樹偏宜屋角遮、青山正補牆頭缺、（緑樹　偏えに屋角の遮りに宜しく、青山　正に牆頭の欠を補う、）更那堪竹籬茅舍。」と翻案（訓読部分）されている[59]。この翻案は如何なる意味であろうか。ここで日野開三郎『唐代先進地帯の荘園』三「荘園の資産構成」Ⅰ「建造物」(1)「荘門と墻堵」（私家版、1986年）によれば、荘園の建物と庭園等は、一般に高大に造られた墻堵に囲まれていたとある（その墻堵の周囲に田園がある）。これを参考に、馬致遠の「青山正補牆頭缺」を見れば、屋敷の墻堵の上、墻堵の向う側に青山が見えるという意味になろう。してみると、孟浩然詩の「郭」が友人の荘園の屋敷を囲む墻堵を、立派な城郭に見立てて表現した可能性も出てくるのである。その場合、孟詩の「青山郭外斜」は「青い山がこのお屋敷の城壁のような立派な塀の向こう側に斜めに連なっている」という意味になる。また第二節（２）説のうち、10)朱氏・12)張氏が「郭外」をそれぞれ「山荘的外辺」「荘外」と解するのは、あるいはこの立場であるかもしれない。ちなみに、画者不詳「過故人荘」（貴州省貴陽市『初中生輔導』2007-Z1）に描かれているのは、日野氏

が述べられるような荘園の邸宅のものと思われる墻堵、そして門である。

「郭」が荘園の建物を囲む墻堵の意味とも思われる例はこのほかにも見られた。崔顥「和黄三安仁山莊五首」其一（全唐詩續拾遺巻十二・839頁）に「春到郭園靜、冰開水木清。（春到りて　郭園静かなり、冰開いて　水木清し。）俄聞北山客、虚淡遲聲榮。不獨閑爲貴、兼將山自名。古人情亦爾、君識古人情。」とある。日本藏唐抄本『新撰類林抄』（巻四）に伝わった作品であり、一句目に校異はない[60]。「郭園」の「郭」が人名など固有名詞でない限り、これは詩題の「山莊」の墻堵を指すと考えられよう。ただ「郭園」は、唐詩にはここを除いて見当たらないので何とも言えないが、あるいは城郭近くの荘園の意味とも思われる。なお「園郭」の用例は見られない。

許渾「題青山館即謝公館」（巻五二九・16-6051）には「昔人詩酒地、芳草思王孫。白水半塘岸、青山郭門横。（白水　塘岸に半ばし、青山　郭門に横たわる。）懸巖碑已折、盤石井猶存。無處繼行樂、野花空一尊。」とある。詩題の「青山館」について、羅時進『丁卯集箋証』（江西人民出版社、1998年）によれば「青山」は安徽省当塗県東南にある青林山とも呼ばれる山で、謝朓が宣城太守であったときにこの山の南に別宅を築き、それが詩題の「青山館（謝公館）」である。『中国歴史地図集　第五冊　隋・唐・五代・十国時期』（地図出版社、1982年）では、青林山は当塗県より姑熟水をはさんだ南に比定されている。ここの「郭門」もあるいは「青山館」という邸宅の墻堵の門を指すのであろうか。問題の句が「青山」と「郭」の組み合わせで、謝朓そして孟浩然に依拠していると考えられるだけに、注意すべき用例であろう。またこのように「郭」が荘園の建物を囲む墻堵の意味を持つとすれば、第五節の王維「新晴野望」の「郭門臨渡頭」も同様に解釈できるかもしれない。

孟浩然「過故人莊」詩の「郭」についても、以上のような解釈の可能性を残しつつ、本稿では、ひとまず「青山郭外斜」を「青い山が町（町の城壁）の向こう側に斜めに連なっている」あるいは「青い山が町の外（のこの地）において斜めに連なっている」と解しておく。

【注】

(1) 以下、本稿における孟浩然詩の引用は、徐鵬『孟浩然集校注』（人民文学出版社、1989年）により、その頁数を示す。また拙稿「孟浩然詩注作品対照表（増補版）」（『１９９９年度中唐文学会報』）の作品番号を頁数のあとに付す。

また便宜上、本稿で引用または参照する孟浩然詩の注釈書の書誌をここに掲げておく。

【全注釈】

游信利『孟浩然集箋注』（台湾学生書局、1979年）

蕭継宗『孟浩然詩説修訂本』（台湾商務印書館、1985年）

李景白『孟浩然詩集校注』（巴蜀書社、1988年）

曹永東箋注・王沛霖審訂『孟浩然詩集箋注』（天津古籍出版社、1990年）

趙桂藩『孟浩然集注』（旅游教育出版社、1991年）

佟培基『孟浩然詩集箋注』（上海古籍出版社、2000年）

陳貽焮『増訂注釈全唐詩』第１冊（李華担当、文化芸術出版社、2001年）＊全注釈に数える。

【選注】

陳貽焮『孟浩然詩選』（人民文学出版社、1983年）

李小松『孟浩然韋応物詩選』（三聯書店香港分店、1983年）

厳紀華『孟浩然詩選』（五南図書出版有限公司、1990年）

王達津『王維孟浩然選集』（上海古籍出版社、1990年）

葛傑『王維孟浩然詩選注』（上海古籍出版社、1994年）

袁閭琨『全唐詩広選新注集評』第２巻（黄士吉等担当、遼寧人民出版社、1994年）＊選注に数える。

梁志林・焦国章『王維孟浩然詩歌精選』（花山文芸出版社、1996年）

章池『中国古典文学精品屋・王維　孟浩然』（黄山書社、2001年）
劉寧『王維孟浩然詩選評』（上海古籍出版社、2002年）
葛景春『王孟体詩選』（河北大学出版社、2004年）
陳鉄民『王維孟浩然詩選』（中華書局、2005年）
黒川洋一「孟襄陽集編年詩注」（上）（下）（続）（続々）（三続）（大阪大学教養部『研究集録（人文・社会科学）』31・32・33・34・35、1983年～1986年）

(2)『山口女子大国文』13、1997年。

(3) 以下、本稿では、町（まち）を城郭都市の意味で用いる。

(4)『唐詩概説』（岩波書店、1955年）。

(5)「情寓于景景為情設―《過故人荘》賞析」（『山西師院学報（社会科学版）』1983－2）。

(6)「孟浩然事跡考辨」（『文史』4、1965年）。

(7) 松浦友久『漢詩の事典』Ⅲ「名詩のふるさと（詩跡）」（植木久行担当、大修館書店、1999年）。

(8) 以後孟浩然詩の系年と事跡は、特に注意しない限り、注(1)徐氏『校注』所収の「作品系年」による。

(9)「南山」について注釈するもののうち、襄陽の峴山とするものが李景白『校注』・趙桂藩『集注』・佟培基『箋注』・葛景春『詩選』であり、注(6)陳貽焮氏論文も峴山とする。襄陽の鳳凰山とするものが曹永東『箋注』、峴山あるいは鳳凰山とするものが陳貽焮『増訂注釈全唐詩』第１冊、具体名を示さず襄陽の山とするものが徐鵬『校注』である。このほか、長安南の終南山とするものに、李小松『詩選』・厳紀華『詩選』がある。なお「南山」を終南山とすると、孟浩然はそのあたりにも荘園を有していたことになる。これに関して、妹尾達彦「唐代長安近郊の官人別荘」（唐代史研究会報告第Ⅳ集『中国都市の歴史的研究』、刀水書房、1988年）は、論題通り唐代の長安近郊の官人の別荘を比定し考察を加えたものであるが、妹尾氏はそこで、「歳暮歸南山」（148頁、109）・「題長安主人壁」（82頁、62）・『唐才子傳』巻二「孟浩然」を典拠として、孟浩然は、長安南郊の終南山にある先祖代々の別荘を相続したとしている（ただ「南山下與老圃期種瓜」が挙げられていない。）。一方、李浩『唐代園林別業考論（修訂版）』下編「唐代園林別業考」（西北大学出版社、1996年）は、唐代の荘園を依拠した資料を示して地域別に掲げたものであるが、ここには、終南山の孟浩然の荘園は挙げられていない。

(10) 本詩の訳注において、本詩を孟浩然の郷里襄陽の作とするものとしては、中国社会科学院文学研究所古代文学室唐詩選注小組『唐詩選注』上冊（北京出版社、1978年）、王達津『選集』、陶今雁『唐詩三百首詳注』（百花洲文芸出版社、1996年）、張忠鋼『唐詩三百首評注』（斉魯書社、1998年）があった。また孟浩然の諸年譜には、論者の見た限りで、本詩は取り上げられていない。

(11)（２）－5）・7）の石川氏・深澤氏はそれぞれ「村をとり囲む城壁」「村をとりまく城壁」とされるが、これも村の防壁・障壁との解釈であろう。

(12) 謝氏論文には「九年義務教育初級中学語文三年制教科書（人教版）第一冊第25課《詩五首》中的古詩」とあり、国氏・宋氏論文には「《過故人荘》的授課対象是初中一年級的学生」とある。

(13) 孟浩然詩の注釈書については注(1)を参照。本節では、繁雑を避け、特に問題とならない限り注釈書名を示さない。また諸注釈という場合でも、問題点に言及する注釈書だけを指している。

(14) 注(7)に同じ。

(15) 以下、本稿における孟浩然詩以外の唐詩の引用は、『全唐詩』（中華書局、1960年）により、その巻数と25冊本の冊数・頁数を「冊数-頁数」というかたちで示す。

(16) ただ漢水に郢水という別称があった、つまり郢水が固有名詞である可能性もあるが、待考。

(17) 本稿が底本とした徐鵬『校注』は、その底本（四部叢刊本）が「行至漢川作」とするのを、宋蜀刻本『孟浩然詩集』・明万暦顧道洪刊本『孟浩然詩集』・明毛晋汲古閣『五唐人集』本『孟襄陽集』

によって「行出竹東山望漢川」に改めている。ただこの詩題を採用する下記の注釈書の「竹東山」の考証について、論者はよく理解できていない。この詩を開元二二年、蜀より郷里襄陽への帰途の作とする徐鵬『校注』が「今湖北省宜昌市，江陵県均有東山。」とし（論者には「竹」との関連がよく分からない）、佟培基『箋注』・陳鉄民『詩選』が房州竹山県（湖北省竹山県）とする。なお竹山県は襄陽の西方に位置し、堵水のほとりにある。またこの堵水は漢水に入り、襄陽へ流れる。なお佟氏は根拠として『元和郡縣圖志』（巻二一）山南道二・房州「竹山縣、本漢上庸縣、古庸國也。……後魏改置竹山縣。因黄竹嶺以爲名也。方城山、在縣東南三十里。頂上平坦、四面險固。山南有城、周十餘里。」を引いているが、「竹東山」の「東」をどう考えているかは説明されていない。

(18) 徐鵬『校注』によれば、注(17)宋蜀刻本・顧道洪刊本と『全唐詩』が「盤壠」を「盤坂」につくる。それならば曲がりくねった坂道。やはり「平田」の平坦さと険しい坂道とで、反対概念の対になる。

(19) 宮崎市定「私の中国古代史研究歴」（『中国古代史論』、平凡社、1988年）参照。また漢代に郷の周囲にも城郭が廻らされていたことについては、 宮崎市定「中国における聚落形体の変遷について」（同上）参照。

(20)『元和郡縣圖志』（巻五）河南道一・緱氏縣「緱氏山、在縣東南二十九里。王子晉得仙處。」

(21) 二句目の「南雍州」が多くの注釈が言うように「襄州」だとすると、「安陽」を「安養」すなわち唐の襄州･安養県（湖北省襄樊市北）とする説が論者にはおもしろく思われる。鄧光礼「孟詩《登安陽城楼》之“安陽”応作“安養”考」（『華南師範大学学報（社会科学版)』1988－1）によって提示され、王達津『選集』・佟培基『箋注』もそうしている。なお「南雍州」を「襄州」とする根拠の一つに『元和郡縣圖志』（巻二一）山南道二・襄州「永嘉之亂、三輔豪族流於樊・沔、僑於漢水之側、立南雍州。孝武帝以朱序爲南雍州刺史。……恭帝改雍州爲襄州、因州南襄水爲名也。」がある。

(22) 次節の唐詩の調査も含めて、見落としの可能性があることをお断わりしておく。「郭」が人名などで用いられている場合は対象外である。また「郭」と同じ意味で用いられる「廓」も調査対象としている。但し「廓」がひろい、むなしいの意味で用いられている場合は対象外である。

(23)『詩經』『楚辭』を除く先秦漢魏六朝詩の調査と用例は、逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局、1983年）により、その巻数と頁数を示す。

(24)「善曰、河南郡圖經曰、東有三門、最北頭曰上東門。」「向曰、上東門、洛陽東門。」

(25) 顧紹柏『謝霊運集校注』（中州古籍出版社、1987年）、森野繁夫『謝康楽詩集』巻上（白帝社、1993年）参照。

(26) 花房英樹『文選（詩騒篇）三』（集英社、1974年）「町の外囲い」、陰法魯等『昭明文選訳注　第三冊』（吉林文史出版社、1992年）「郊郭：郊外。郭，在城的外囲加築的高牆。」

(27) 興膳宏『六朝詩人伝』「顔延之」（釜谷武志担当、大修館書店、2000年）。

(28)『漢語大詞典』では､「郭邑」を「城邑」と釈す。また「城邑」は「城和邑。泛指城鎮。」と釈す。これは都市と小さな町（注(19)宮崎「中国における聚落形体の変遷について」によれば、鎮は宋以後に出現し、普通には城郭を持たない。）という意味であろう。であるならば顔詩の「郭邑」は桂林郡の郡城と周辺の小さな町々ということになる。また手許の漢和辞典である『角川新字源』は「城邑」を「都市。城市。都邑。」と都市の方向だけで解釈する。なお『詞典』が「郭邑」を「城邑」と釈する場合、「郭」＝「城」＝町と考えていることは明らかである。

(29) 賀新輝『古詩鑑賞辞典』（中国婦女出版社、1988年）、盧昆等『漢魏晋南北朝隋詩鑑賞辞典』（山西人民出版社、1989年）は潘慧恵担当の同一内容。

(30) 入谷氏の「小都会」について､具体的にどのような集落を意味されているのかよくわからないが、町（城郭都市）と村落を対比的に考える本稿においては、これを城郭都市としてとらえておく。

(31) 同書の解説に「その詩に時に詠われる郷里が、都、建康の近くにあったようである」とある。

(32) 曹融南『謝宣城集校注』(上海古籍出版社、1991年)、呉小如等『漢魏六朝詩鑑賞辞典』(上海辞書出版社、1992年) も「郭」に言及しない。

(33) 中村「中国聚落史研究の回顧と展望―とくに村落史を中心として―」(唐代史研究会報告第Ⅲ集『中国聚落史の研究』、刀水書房、1989年)、谷川「六朝時代における都市と農村の対立的関係について―山東貴族の居住地問題からの接近―」(唐代史研究会『中国の都市と農村』、汲古書院、1992年)。

(34) 本節先秦詩・漢詩の「城郭」「郭」は、それが農村聚落であったとしても、城郭都市ということになる。

(35) 兼田信一郎「六朝期江南の村落についての一考察」(『堀敏一先生古稀記念　中国古代の国家と民衆』、汲古書院、1995年) は、六朝、江南の村落について「その形態の特徴は、漢代の里のように、村壁をめぐらして内部に集住するといった形式をとらず、山地形などを利用し、小集団をなして散居する形態が多かったと考える。」とする。この説に対して、堀敏一『中国古代の家と集落』第六章「魏晋南北朝時代の「村」をめぐって」(汲古書院、1996年) は「南方の村落にも、村門・囲壁のあるものが多いと考えているので、この点は今後の問題点であろう。」と反論する。また堀氏は同論で華北の村落について「塢壁ほどの厳重な形をとらないまでも、この時代の村が一般に壁で囲まれていたことは確かであろう。」とする。

(36) 注(33)谷川氏論考によれば、研究史上において、宮崎説は、宮川氏が予測した六朝社会における都市と農村の分化という問題を、はっきりと解明したものとして位置づけることができる。

(37) 用例の調査はすべて『全唐詩』(中華書局、1960年)・陳尚君『全唐詩補編』(中華書局、1992年) による。

(38) 仁井田陞『唐令拾遺』戸令第九 (東京大学出版会、1933年) によれば以下の通り (下線‥川口)

一乙〔開七〕百戸爲里、五里爲鄉、両京及州縣之郭内分爲坊、郊外爲村、里及村坊、皆有正、以司督察、(里正兼課植農桑、催驅賦役。) 四家爲鄰、五家爲保、保有長、以相禁約、

一丙〔開二五〕諸戸以百戸爲里、五里爲鄉。四家爲鄰、五家爲保、毎里置正一人、(若山谷阻險、地遠人稀之處、聽隨便量置、) 掌按比戸口、課植農桑、檢察非違、催驅賦役、在邑居者爲坊、別置正一人、掌坊門管鑰、督察姦非、並免其課役、在田野者爲村、村別置村正一人、其村滿百家増置一人、掌同坊正、其村居如不滿十家者、隷入大村、不得別置村正、

(39) 宮川「唐五代の村落生活」(『岡山大学法文学部学術紀要』5、1956年)、曽我部『中国及び古代日本における鄉村形態の変遷』第二章「秦漢および均田法時代の鄉村形態」第四節「唐の鄉里制と村制」(吉川弘文館、1963年)、注(35)所掲堀氏論著・第九章「唐代の鄉里制と村制」。

(40) 宮崎氏前節所引論文、愛宕氏前節所引論著、愛宕『唐代地域社会史研究』第一章「両京鄉里村考」(同朋舎出版、1997年)、『日野開三郎東洋史学論集第十八巻・続唐代邸店の研究』五「草市の発展と店 (一)」(三一書房、1992年)。

(41)『中国歴史地理研究』「中国における集落の発達」(同朋舎出版、1977年)。引用にあたり旧字体を新字体に改めた。

(42)「愛人忠主利、善守閉爲勇。苟非小勤瘁、安得期逸寵。版築恐土疏、襄城嫌役重。藩柵聊可固、筠篁近易奉。差池截浦沙、繚繞緣隈壟。矗似長雲亙、森如高戟聳。預絶豺狼憂、知免牛羊恐。閭里寛矯歩、榛叢恣踏踵。始果遊處心、終日成閒拱。」

(43) 陳鉄民『王維集校注』巻七 (中華書局、1997年) は「陰盡 (晝を校訂)」二句から、「知寓之田園當在長安附近。」とする。なお「小苑」については「右丞詩中「小苑」字凡四見，或指清華宮，或指興慶宮，……」とする。

(44) 花房英樹『白氏文集の批判的研究』(朋友書店、1960年) による。以下、同じ。

(45)『白氏文集　四』(竹村則行訳注稿担当、明治書院、1990年)。

(46)『太平寰宇記』（巻一〇六）洪州・南昌縣「漢南昌縣地、屬豫章郡。隋平陳、改爲豫章縣。以郡名邑。唐寶應元年六月改爲鍾陵縣、因山爲名。貞元中又改爲南昌。」「龍沙在州北七里。一帶江沙甚白而高峻。左右居人時見龍跡。按雷次宗豫章記云、北有龍沙、堆阜逶迤、潔白高峻而似龍形、連亘五六里。舊俗九月九日登高之處。」

(47)『白氏文集　三』（竹村則行訳注稿担当、明治書院、1988年）。

(48) 羅聯添『柳宗元事蹟系年暨資料類編』「事蹟系年」（国立編訳館中華叢書編審委員会、1981年）。

(49) 戸崎哲彦『柳宗元永州山水游記考』（中文出版社、1996年）p.103に「唐代の城についても、柳宗元は「永州韋使君新堂記」に「永州は実に惟れ九疑の麓なり。其の始め土を度かる者、山を環らして城を為る。」というから、瀟水という江に囲まれて周囲に丘陵をめぐらしたものであり、唐代の城郭もそれと大差はなかったであろう。ただし、永州が九疑山の麓に当たるというのはきわめて巨視的にとらえたものであり、永州城から九疑山までは直線距離にして百キロほどあり、またその間に尾根が脈脈とつづいているわけでもない。」とある。同書pp.104－105の地図も参照。あるいは「山郭」の山は九疑山を指しているのかもしれない。

(50)『白氏文集　二下』（柳川順子訳注稿担当、明治書院、2007年）。

(51) 岑参「熱海行送崔侍御還京」（巻一九九･6-2051）「送君一醉天山郭、正見夕陽海邊落。」、嚴維「荊溪館呈丘義興」（巻二六三・8-2916）「野燒明山郭、寒更出縣樓。」も同様の例とできよう。また銭起「送族姪赴任一作之郡」（巻二三八・8-2653）「雲山深郡郭、花木淨潮田。」という例もある。

(52) 前野直彬『唐詩鑑賞辞典』（今西凱夫担当、東京堂出版、1970年）、前野直彬『唐代詩集（下）』（平凡社、1970年）、前野直彬・石川忠久『漢詩の解釈と鑑賞辞典』（旺文社、1979年）、松浦友久『校注唐詩解釈辞典』（高橋良行担当、大修館書店、1987年）、石川忠久『漢詩を読む杜牧１００選』（日本放送出版協会、2004年）など。

(53)『中国自然詩の系譜』第四章「自然詩人銭起」第五節「「江行無題一百詩」考」（大修館書店、1995年）。

(54) 華忱之等『孟郊詩集校注』（人民文学出版社、1995年）、郝世峰『孟郊詩集箋注』（河北教育出版社、2002年）、瞿蛻園『劉禹錫集箋証』（上海古籍出版社、1989年）、蔣維崧等『劉禹錫詩集編年箋注』（山東大学出版社、1997年）、陶敏等『劉禹錫全集編年校注』（岳魯書社、2003年）によれば、于頔。

(55) 大安書店影印本、1967年。

(56) 劉長卿「雨中登沛縣樓贈表兄郭少府」（巻一四九･5-1544）「何當遂良願、歸臥青山郭。」、李端「長安書事寄薛戴」（巻二八四・9-3236）「千里寄瓊枝、夢寐青山郭。」、武元衡「立秋日與陸華原於縣界南館送鄒十八」（巻三一七・10-3574）「明朝獨向青山郭、唯有蟬聲催白頭。」、顔真卿「水堂送諸文士戲贈潘丞聯句」（巻七八八・22-8881）「從他白眼看、終戀青山郭述奉陸三。」。

(57) 愛宕元『唐両京城坊考』（巻五）（平凡社、1994年）の「銅駝坊」の注釈によれば、漢魏洛陽城（隋唐洛陽城はその西十八里（9.5㎞）の地に築かれた）の南北のメインストリート御街を挟んで銅製の駱駝が置かれていたので、御街は銅駝街とも呼ばれた。また隋唐洛陽城の銅駝坊は銅駝街にちなんだ名称である。

(58)『全唐文』には張説「唐故夏州都督太原王公神道碑」「大城碎葉、街郭迴互。」（巻二二八）、元結「哀邱表」「街郭亂骨、如古屠肆。」（巻三八三）という用例が見られる。

(59) 徐征等『全元曲』第三巻（河北教育出版社、1998年）に依る。

(60) 村田正博・栗城順子『翰林学士集・新撰類林抄　本文と索引』（和泉書院、1992年）

（中国文学）

【附記】本稿は、平成20年度山口県立大学研究創作活動（基盤研究型Ａ）の助成による研究成果の一部である。

孟浩然「過故人荘」詩の「郭」の解釈について

On the Interpretation of “Guo（郭）” in Meng Hao-ran’s *Guo Guren Zhuang*

KAWAGUCHI Yoshiharu
（Chinese Literature）

孟浩然詩作《過故人荘》中有“青山郭外斜”一句。対這箇“郭”字的解釈有両種。一種解釈為“城市，城郭，城牆”，另一種解釈為“村落的防護牆”。

本稿整理分析関於《過故人荘》的歴来主要注釈、主要関聯研究，探討孟浩然詩作中的“郭”与唐代之前詩人及唐代其他詩人詩作中所見的“郭”的用法，并将有関歴史研究的成就作為参考，而探究《過故人荘》的“郭”的解釈：①“城市，城郭，城牆”，②“村落的防護牆”，或者③其他。

本稿通過以上研究認為，“郭”之意為“城市，城郭，城牆”。